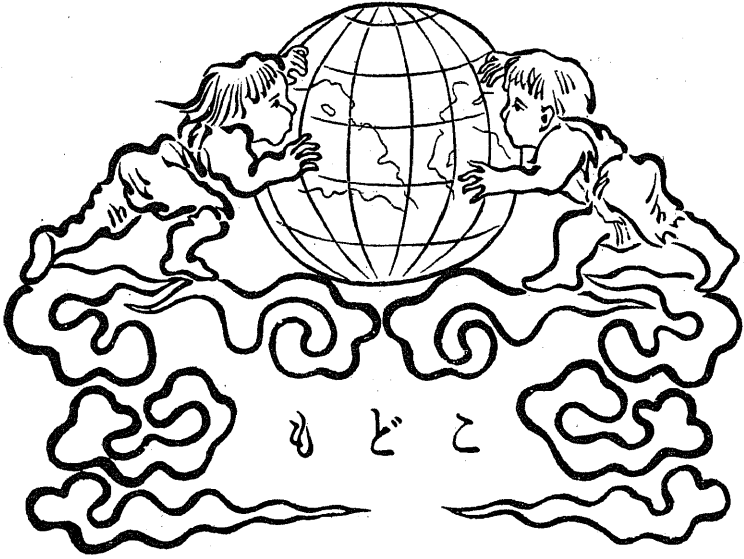


もど子と人婦

號壹第卷參第



打出の小道具

やまとの翁

さても、或年のお正月の
元日の朝、金一に銀藏に龍
吾とゆー兄弟三人が、お屠
蘇にお雑煮のお祝をすまし
た後で、これから一番、三
人で、何所かえ福を見附け
に行こーじやないかとゆー
相談が始まって、元日早々

から、三人とも草鞋脚絆で家を出かけました。

『お正月のこったから、何か知らん福が見附るぜ』といゝながら、三人つれだって、だんく行きました所が、或山の所へ行つて、ひょいと向ゝの方を見ると、何だか、ピカールピカールと光るものがある。『何だろー』『何だろー』と、皆不思議がつて一番兄さんの銀藏が、走って行って見た所が、さゝ見附つた、その光つて居たものわ、銀の塊の山でした。

『さゝ見附けたぞ、見附けたぞ、已わ銀の山を見附けたのだ』と大聲で呼びますから、金一も龍吾も、走って行って見ると、何さま大變な銀の塊です。そこで銀藏わ、『もゝ己の福わ、之で澤山だから、今から家え歸るのだ、お前方わ、どゝする』とい

「ますから、二人わ『私たちわ、まだも少し行って探して見ましょー』とゆーので、銀藏一人わ、澤山な銀の塊を荷なつて、二人に別れて、そこから歸りました。

さて金一と龍吾とわ、兄さんに別れて、二人連れで、そこからだんく進んで行きました所が、一つの山に著きまして、上って行った所が、今度わ前よりもひどくピカーリピカーリと光るものが見える。『そーら福がお出でたな』とゆーので、金一がすたく走って行って見ると、これわ金の塊の山でした。『龍吾、龍吾、見附けた、金の山を見附けたんだ』と一生懸命に呼ぶから、龍吾も走って行って見ると、なる程そこいら一面に黄金の光で一抔、目を明けて見ることも出来ぬ



位光くらひかつて居ゐます。

「やれく兄にいさん

わ 銀ぎんを見み附つけた

が 巳ねわ 黄やう金きんを

見み附つけた さー之

から歸かへつて 兄にいさ

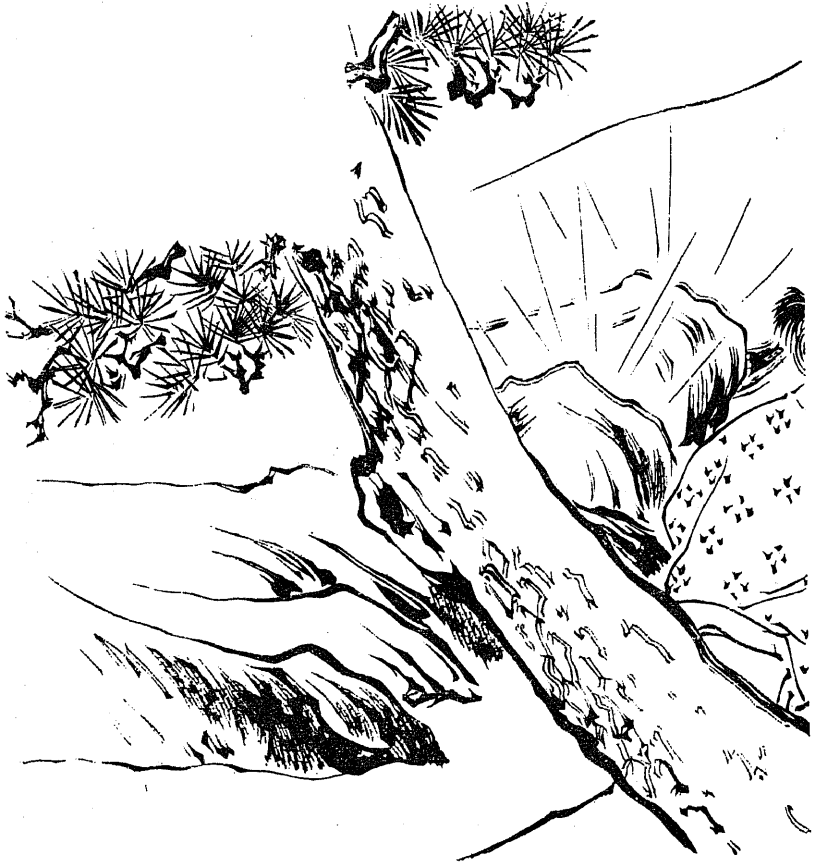
んに見みせ附つけてや

るんだ、龍りゆう吾ご お

前まえ どーする』と

いーました所ところが

「私わたしわ まだ見み附つ



けませんから、これから 今一奮發して 見附けて來ましょー』
 といーますので、金一わ 又黄金の塊を一抔せたらつて 歸つ
 て 行きましました。

さー銀藏わ、銀の山に當るし、金一わ黄金の山を見附けた、
 己わ この二人よりも、もそつと、いー寶物を見附けたさんけ
 れば、家え歸つて、二人に顔を合わすことが出來ない、何かい
 ー福を見附けたいもんだなー』など、獨りで考え込んで居ま
 したが『いや、こんなに 考へてばかり居たつてつまらん、一
 っ奮發して歩き出さんけりや』と言つて、それから龍吾わ、一
 生懸命に歩き出しました。

所が、今度わ、行つてもく、何も見附かりません、山もなけ

れば 光るものも出て来ない。「はて何か出て来そーなもんだな
 と思つて 行つて見るが 何も出ない。其中に 日わだんく
 西の方に傾きかゝるし 鳥など 五六羽づゝ連れだつて か
 かーと鳴きながら 飛んで行きます。もー暮れかゝつて来たか
 ら、多分自分等の巢え歸るのでしよー。どこを見ても、人の家
 らしいものが見えないし、其中にお腹が空いて来る、足が痛く
 なつて歩けなくなる、龍吾わ、もー一人で、何だか寂しい様
 悲しい様な気がして来て「ア、銀藏や金一わ、もー今頃わ家
 え歸つてお祝などして居るだろー、他所の人だつて、今日わ、元
 日じやないか、皆面白い事などして遊んで居るだろーに、已わ
 こんな寂しい所で、お腹わ空るし、足わ痛くなるし、困つた目

に出遭つたもんだ、福を探すなんて、考えて見ると、こんな馬鹿を見るのなら、始めっから廢せば宜かつた』など、切りした後悔しながら、痛い足を引きづつて歩いて居る中に、日わずっぽり暮れてしまつて、眞暗になつて、とーく大きな森の中へついた時分、足の痛いのと、腹の空いたので、もー一歩も歩けなくなつて、大きな木の根の所へ、平太張つたなり、身動きもならない位でした。

暫らく休んで居ると、足の痛いのを、だんく直つて行つたけれど、お腹の方、だんく空いて来る、これでわ、叶わんと思つて、ひょいと、向うの方を見ると、幽かに火の光か、木の間から見える様だから、『さし、しめた、彼こそ人の家に違ない

一っ行って、何でもいーから食べさせて貰うのだ』といつて、ペコ〜になつたお腹を抱えて、其方え歩き出しました。さてやつと、其所へ行つて見た所が、奇態でありませんか、それわ人家でも何んでもなくつて、一人のお婆さんが、蠟燭を燈して木の根に腰をかけて居る。龍吾わ、ひょいと見て、妙だなと思つたけれど、もー何も考える隙わない、お婆さんに向つて『私わ、福を探がしに、出かけたもんですが、御飯を今朝食べたっ切りなもんですから、お腹が空いて一足も歩けないんです、何んでもいーから、お婆さん食べさせてくれませんか』と願いました所が、お婆さんわ『やれ〜それわ氣の毒なこつた妾も食べべるものといつて、別に今何も持つてわ居ないのだが』と

いて、暫らく考えて、『オー それく、この半巾を上げよー』
 といつて、それはく汚ない 古半巾を一枚 懐から 取り出
 して呉れましたから、龍吾わ、それを見て、『こんなものわ、食
 べられないじやありませんか おまけに こんな汚い 古半巾
 なぞ……』といますと、お婆さんわ、『ホッホッホ……』と笑い
 ながら、『夫わ、お前 使い方を知らないからだよ、じゃー一度
 妾が使つて見せて上げよー』といつて、其半巾を一二度振つて
 見ますと、さー奇態じゃないか、そこえ以て 煮え立ての鶏だ
 とか、栗のきんとんだとか、鱈魚のおさしみだとか、鴨のお雑煮だ
 とか、さー出るわく澤山な御馳走が一度に并んだ。

婆さんわ そーれで覽とゆー風で『さーこれでも好きなも

のから、お上り』といつて笑つて居ます。腹の空いた時に不味いものなしだのに、ましてこんな御馳走が出たもんですから、龍吾わ、も一夢中になつて食べにかゝつて、やつと腹を慥らえて、さ一生き返つた、と思つて、頭を上げて禮を言を一とした所が、古半巾だけあつてお婆さんわ、何所え行つたのかも一影も見えない。龍吾わ、奇態なこともあればあるものだと思つたが、これわ何でも福の神さまが、お婆さんに化けて來て自分に授けてくれたのだ、これさえあれば大丈夫、どこまで行つても腹の空いてくる氣遣わなし、さ一これからほつくと福が向いて來そ一だな一』などゝ考えて獨りで喜びながら、そこを出かけました。

も、腹わ、一杯になるし、よし又腹が空いて來ても、此古
 半巾さえあらば、大丈夫だと思つて居ますから、自然と足も輕
 く、心も強くなつて、龍吾わ、寂しい夜道を、獨りて恐いとも
 何とも思わないで、森の中を歩いて行きます。

さて、だんくと歩いて行つた所が、とーく一軒の人家え
 着きました。最も人家とゆゑ一丈けで、丸で、豕小屋の様な汚い
 小さな藁小屋であるのですが、夫でも明りが付いて居て、人も
 居る様でしたから、龍吾わ、大變に力付いて、案内を乞うて這
 入つて見ますると小屋の中にわ、年の頃、五十許りの男が、獨
 り、圍爐裡の火にあたりながら、甘薯など、焼いて食べて居ま
 す。

『お前さん、どこから来ました』と聞きますから 龍吾わ
 『己わ今朝、兄弟三人で福を探がしに 家から来たのだ』と答
 えますと、其男のいゝますにわ。
 『ハ、今朝家を出たのなら も、大分お腹も空いたろゝに、
 まゝ此甘薯でも お上んなさい』といつて 一つ取つてくれま
 すから。

『いゝや御馳走が 欲しければ 己から御馳走してやろゝ 何
 でも食べたいものを いてで覽』といつたもんですから 其
 男わ不思議に思つて、『お前さん、何でも出るとゆゝのか、だ
 って何もこゝで御馳走が出来るわけぢやないか』といつ
 て、中々眞實にしそゝにもない。

そこで龍吾わ、『今日わ、お正月だから、鴨のお雑煮でも御馳走しよーかなー』などい言つて、先きの古半巾を、二三度振つて、擴げた所が、奇妙く目の前に、糞立のお雑煮のお膳が出來た。

さう其男わ驚いた、この小僧さん 不思議なものを持って居るなと思つて居ると、又お酒などもちやんと出て來て、龍吾が、しきりに勧めるから、食べて見ると 何ともいえない味がするので、なら腹で御馳走になりました。

さて食べて仕舞つてから、其男わ龍吾に、其不思議な半巾のことを尋ましたが、龍吾わ、『これわ、己が神様から授かつた寶物だと 申して居ます。

すると其男わ、黙つて感心して聞いて 居ましたわ、やがて

形を改めて龍吾に申しますにわ

『神様から　こんな結構なものをお授かりになるので見ると、お前さんわ餘程豪い人に違がない、そこで　この老爺が一つお前さんにお願があります、とゆーのわ、この先きの森の中に一人の悪者が住んで居て、夫が毎日くこの老爺を苦しめに來ます　一人と一人となら、この老爺も負けわしないのですけれど、其奴、不思議な法螺貝を持って居て、其貝を吹き立てると何百人とも知れぬ軍勢が　どこからとなく飛び出して來るのですから　堪りません、どーか　此老爺を助けると思し召して、其惡者を一つ征伐してくれませんか、其代り　お禮にわ、私しの持って居る此金錠を上げます。此金錠を一つたくと、何時

